群馬詩人クラブ
# 会報
No.291

編集／群馬詩人クラブ幹事会
代表／平野秀哉
発行／群馬詩人クラブ事務局
〒370-3102
高崎市箕郷町生原1730
龍昌寺
印刷　三協印刷
振替番号　00140-8-728969　狩野務

主な記事

●けやき通り　鈴木惠子 ……2
●第23回群馬詩人クラブ現代詩作品展案内 …2
●詩集評
樋口武二詩集
「ものがたり あるいは、ゆらめく風景」を読む
佐藤榮市 ……3
●年刊詩集第38集　原稿募集 ……3
●詩集評
「ネオ・エッダ」ふたつめの言い訳
佐伯　圭 ……4
●インフォメーション ……4～6
●ご報告／編集後記 ……6

## 久保田穣君追悼

梁瀬和男

久保田君の死去は旧臘の二十一日で、私は二十二日の早朝、知人からの電話で知った。私はその報を受けた時、久保田君の生涯は、詩に対する限りない傾注であったことを痛感した。桐生高等学校在学中に友人たちと謄写版刷りの詩誌『リミット』を創刊し、群馬大学教育学部へ進むと、詩の同好の学生たちと『ルインズ』を刊行した。このような若い時代の文学への興味・関心は、青春期の経過と共におとろえてゆく例を、私はしばしば見て来ているが、久保田君の場合は全く逆で、詩の視野は拡大して題材は強固になり、それを支える彼の詩論もその領域を拡大して行った。

久保田君の詩業の第一は、言うまでもなく「詩作」である。それは多くの詩集として残されているが、詩集には『小鳥の死』・『日常』・『風樹』・『蝉の記憶』・『眼の列』などがあり、これらに続いて刊行された『サン・ジュアンの木』は第三十五回の壺井繁治賞を受賞している。彼の詩の変容は簡単に辿ることは出来ないが、大学時代の若々しい抒情は、詩作の進展と共に現実への鋭い視線を加え、人間の存在と現実を主題とするようになった。これは久保田君の体験による思想の深化にもとづく結果で、その成果が壺井賞に結実したと言っても過言ではあるまい。

次にあげられるのは、群馬に関係のある詩人たちへの、詳細な評伝である。代表的な著作として、二つをあげておく。その二著作は『栗生楽泉園の詩人たち』および『群馬の夭折の詩人たち』だが、久保田君は二つの著作に取り上げた詩人が、かえりみられない事に強い疑念を持ったのであろう。右の二著により、群馬の詩の遺産にあらたな照射が与えられたことになり、この著作により認識をあらたにした人も少くないと思う。「楽泉園」の書は、第十三回の小野十三郎賞を受賞している。その他詩人に関する研究・評伝として東宮七男、木村次郎、黒田三郎氏らに関する多くの論考があるが、研究は精緻を極め、論調には詩人への敬愛が感じられるのである。

以上の如くみずからの詩的営為を充実させる一方で、群馬詩人クラブの代表として運営に力を注ぎ、世界詩人会議が前橋で開催された折には萩原朔太郎に関する分科会の運営について関係者と協議を重ね成功に導いた。

また詩誌『軌道』の編集者を長期にわたってつとめ、種々の企画を誌面に実現させたのも、久保田君独自の立案であった。『軌道』は、岡田刀水士氏によって創刊された詩誌であったが、久保田君は同誌の四十号頃から終刊の百六十一号まで編集を受け持った。

限られた紙幅で彼の足跡は語りつくせないが、一途に「詩」を求め続けた彼の生涯には敬眼するのみである。冥福を祈り、在りし日をしのんでいる。

# けやき通り

鈴木恵子

平成27年2月21日（土）晴れ
出席者　福田　齊藤　鈴木
作品　1　呼び名　福田

こんな書き出しで書き続けられた例会日誌〈けやき通り〉が、大学ノート5冊目になった。

詩誌『けやき』の創刊は、一九八八年（昭和六十三年）六月十日初夏号である。

七月十八日付けの上毛新聞紙上に〝主婦グループが詩誌〟の見出しで、メンバーは、角田弘子　石綿清子　福田尚美　齊藤加珠子の四人の女性が詩誌を発行した。と詩誌の写真と共に紹介されている。

また、同七月三十日付けの上毛新聞の同人誌紹介の欄にも記事が載っている。

創刊号は、百部発行し各人が詩を二編、エッセイ一編づつを発表。誌名の「けやき」は、前橋駅前のケヤキ並木の清々しくたくましいイメージから採った。

とある。表紙は、ケヤキの大木が下から描かれ、題字はあざやかな緑色で書かれている。

第二号は、同年の十一月に発行され、表紙もケヤキの大木の上に満月が輝いて秋を描いている。

それから二〇〇七年夏第三十九号まで、詩二編エッセイ一編づつを発表、編集は交代で担当した。

同年十一月には『けやき』二十周年を記念し第四十号をアンソロジィ特集とした。今まで書き溜めた詩を五編とそれぞれが詩への思いを綴ったエッセイを一編づつ載せた。今、読み返しても同人夫々の詩への熱い思いが伝わってくる。

二〇一一年秋　第四十五号から年一回の発行となった。詩は四編、エッセイは一編づつ編集は交代でしている。去年の秋には、第四十八号を発行した。

創刊の時から、一年に十回（八月と十二月は休み）の例会を続けてきた。

今も詩作品を一編または二編持ち寄り、合評を行っている。考え抜いてやっと書き上げた最後の一行を「ないほうが良いのでは・・」と評されて、「やっぱりそうか」と納得したり、「これは譲れない」と言い合ったり、毎回充実した時を過ごしている。

持ち寄った作品と共に、例会での話し合いの要点を〈けやき通り〉に書き記している。五冊のノート〈けやき通り〉は、詩誌『けやき』の根の様に思う。

「利根の源流に住む皆様は、みずみずしく水音を立てている詩人になって欲しい。」

ある詩人から送られた言葉を忘れないように、『けやき』はありたいと思っている。

## 第二十三回　群馬詩人クラブ現代詩作品展

**テーマ**　つながる

**会　場**　水と緑と詩のまち　前橋文学館（三階）

**会　期**　6月7日(日)～21日(日)
9：30～17：00まで
水曜休館　最終日は13時まで

**参加費**　三百円　お一人何点でも可
＊立体作品の展示台が少ないので持参できる方はよろしくお願いいたします。

**搬　入**　6月6日(土)　13時～14時

**搬　出**　6月21日(日)　13時～15時

右記に搬入できない方は、搬入を他の会員に依頼されるか、6月5日の19時までに「榛名まほろば」へ作品をご持参ください。また搬出の際、ご都合がつかない方の作品は、一時的に「榛名まほろば」で預かっていただけるということですが、その場合、保管は6月22日(月)～6月28日(日)とさせていただきます。

**朗読会**　6月13日(土)　14時～17時

**懇親会**　6月13日(土)　17時30分～
懇親会参加費は四千五百円
場所は文学館向い一階
「身土不二」(シントブリ) TEL027-235-1631

キャンセルする場合は、お手数でも6／11(木)夜までに、高田（027-232-5218）までお電話での連絡をお願いいたします。

詩集評

## 樋口武二詩集「ものがたり　あるいは、ゆらめく風景」を読む

佐藤榮市

この詩集の表紙一隅にはキュートな絵があって、蘇芳色?に白いラインのある巻貝の虚ろから、黄橙の茎が垂直に伸び、緑の芽は二股に分かれ、茎と同じ色の蝶が止まっています。乾いた機体から濡れた抒情の目が開き、超次元に展翅するものを呼び寄せているみたい、一六〇のコマに分断された詩風景のイコンのように眺められました。一コマの行数は四から七までの間で収められ、初読の折りは、五なら五と定めた方が構図的には鮮やかになるのではと感じましたが、樋口さんは反定型の意識こそが肝要とお考えのようで、このあたりの考えの違いは、何十年も俳句形式で物に対してきた僕の反省とすべき点なのかも知れません。僕も眠りが浅くなると夢を見ているわけですが、いつも不思議に思うのは、常にその夢が物語的なものを形成することです。現では全く些末な記憶でしかないものが物語の核となることにも驚いています。樋口さんのこの詩集での詩法は、付加されるもののムーブメントが、不条理とか非在とかの輝きによって、ぼんやりとした巻貝のようなものをレリーフすることにあるので、乾いた叙情を目指すといわれるのは、そのことを差しておられるのでしょう。ひとつの意味らしきものが、指示語と動きの連続性のなかで鈍い光沢を得て、閉ざされることのない次元の空洞を明示しています。寄せては返し重なる言葉の波が、トータルな物語への差異となって、独自な視野を開くまでには、まだ間がありそうだし、僕もなかなかそこまでは読みこめませんが、好きなフレーズはたくさんあって、楽しく読むことができました。

**そういうこともある、／が口癖の知人が／行方知れずになっている／片方だけの革靴と／草群には／セイタカアワダチソウ（47）**

**空が高いから／野に幻が満ちている／揺らぐような／初夏の木立のなかに／叫ぶように立つ少女の影（86）**

**具合が悪いと聞いて／洋菓子をもって／Kの見舞いに行った／**

**行方不明の兄が／足音のように付いてくる（90）**

**そっと／包みこんだ手を広げると／小さな声を挙げながら／林のなかに戻っていく蝶／昨日の夢のように／閉じられていくものがたり（110）**

**夢だったかと枕をはずすと／昨日のことも、明日のことも／すっかり忘れはてて／田圃の中程で／旗を振りつづけている（158）**

好きなフレーズの少ししか紹介できませんね。残念。すらすらと快い、ひと時の読書でありました。

（詩誌「詩的現代」会員）

## 年刊詩集第三十八集　原稿募集

**締切日**　七月三十一日（木）必着

**参加費**　会員　5000円
会員外　5500円
＊但し、二頁を超える作品は、いずれの場合も一頁あたり2000円の追加となります。

**形式**　見開き二頁（40字×40行）を基本とし、最初の五行は表題・作者名。
＊行数オーバーの場合追加料金となりますのでご注意ください。

**発行**　十一月発行

**配布**　平成二七年度総会にて（2部）
＊当日欠席で郵送を希望する方は、参加費に送料500円を加算して振り込んでください。

**参加費振込先**　郵便振替で左記へ。
口座番号　00110-0-485932
口座名義　篠木登志枝
＊振り込み手数料は自己負担となります。
＊年刊詩集分〇〇円・郵送料500円と明記のこと。

**振込期限**　十一月十日まで

**原稿送付先**　郵送・FAX・メールで開始中
郵送　〒377-0201 渋川市上白井二三三四-一　須田芳枝宛
FAX　0279(53)5718
メール　taku_wan_1@yahoo.co.jp
＊原稿はコピーしておいてくださると助かります。

詩集評

# 「ネオ・エッダ」ふたつめの言い訳

佐伯　圭

一月に「ネオ・エッダ」という詩集を出した。「どなたに詩集評を依頼しましょうか」と、群馬詩人クラブの泉さんから連絡があったが、「自分で書いてもいいですか」と勝手なお願いをした。理由は二つある。

ひとつめは、じっくり読んで感想を書いていただくには時間がなかったということ。「ネオ・エッダ」を読んだ方が何らかの感想を持ち、発言するのを拒むつもりは全くない。だが、詩集評を予め依頼するというのはどうなのだろう。それに、詩集をお送りしたのが一月末から二月の初めにかけてだったから、原稿締め切りまで一ヶ月ほどしかない。お手元に届いたばかりで何か書いてくれと、お願いしずらかったのだ。

それでも、ふつうのあまり長くない作品を集めた詩集であれば、感想を書いていただくこともできただろう。前回出した「ゴッタ」は、七分冊という変わった形だったが、収められた作品はオーソドックスなものが多く、詩集評も井上敬二さん（「群馬詩人クラブ会報」）と堤美代さん（「東国」）に書いていただけた。（その節はたいへんありがとうございました）

だが、今回の「ネオ・エッダ」は、たぶん群馬県で出されている詩集の中ではかなり変わった部類に入る。長編詩や組詩と形容できる作品が収められているだけでなく、内容もかなり特殊だ。この特殊性が自分でこの文を書いている理由のふたつめ。

「ネオ・エッダ」のあとがきに、「前詩集の『ゴッタ』が私の詩の枝葉だとすれば、この『ネオ・エッダ』は、私自身の奥底から汲み上げた根幹とも言える詩群だ」と書いた。

根幹。「桜の樹の下には屍体が埋まっている」という梶井基次郎の言葉を待つまでもなく、土に食い込んだ根はその繊毛を伸ばし、腐乱し溶けていくものを養分として吸い上げながら、樹木の、その生を支えている。

人を一本の樹木に例えるとして、土壌（今ここに存在している自己の基盤）とは何か。日々の生活の中での直接的な体験ばかりではない。書物やテレビ、インターネットを通して得たものも含む、自分を取り巻く世界そのものであるだろう。そして、自分自身の中にも、様々な社会的事象の中にも、腐乱の、醜くも美しい因子は偏在しているのだと思う。

「ネオ・エッダ」は、自分というインナーワールドの、そして人と人とが絡み合う世界の、その秘部に踏み込み、発せられた言葉の群だと、自負してみる。お口に合わなければ、どうか無理に呑み込もうとせず、吐き出していただいて構わない。

最後に。枝葉があり幹や根があるなら、花や実もあるはずだ。果実となるべき第四詩集の準備を、実はすでに始めている。

## インフォメーション

会員の臼井三夫（間山三郎）さんが小説「前橋家畜市場」で日本農民文学会主催の第58回農民文学賞を受賞されました。おめでとうございます。

## 高崎現代詩の会

### 現代詩ゼミのご案内

高崎現代詩の会では、二時から総会が開かれ、総会終了後に現代詩ゼミを開催いたします。会員外の方も参加できます。皆様、どうぞいらしてください。

**現代詩ゼミ**

**日　時**　平成27年4月19日（日）
午後2時40分～4時20分

**場　所**　高崎中央公民館
高崎市末広町二七
☎027-322-5071

**講　師**　真下宏子さん
大手拓次研究会代表
群馬詩人クラブ会員

**演　題**　「大手拓次の人と作品」

## 第18回 大手拓次をしのぶ会「薔薇忌」

**日　時**　平成27年4月29日（水・昭和の日）
13：00～16：00

**会場・内容**
13：00～　墓前祭　大手拓次墓前
13：30～　大手拓次賞授賞式
磯部温泉会館
14：00～　語る集い、茶話会　同右

**語る集い講師**　群馬大学の西田直嗣准教授

**参加費**　五百円

**連絡先**　事務局　大手拓次研究会

**代　表**　真下宏子
電話　027-385-5703

## 第1回〝薔薇の詩人・大手拓次賞〟公募

### 【薔薇の詩を募集します】

**応募期間**　平成27年3月16日（月）まで
（当日消印有効）

**応募資格**　問いません

**送付先、問い合わせ先**
群馬大学教育学部音楽教育講座
西田直嗣宛
〒371-8510　前橋市荒牧町4-2
電話　027-220-7304（直通）

＊封筒表に「大手拓次賞応募」と記すこと

**応募要項**
（1）一篇は400字詰め原稿用紙一枚相当以内。
ワープロ原稿は400字以内。
A4用紙使用／コピー可。
（2）詩篇にタイトル明記（欄外でも可）
氏名は詩篇に明記しないこと。
（3）別紙に以下を記入して原稿と共に提出
①タイトル
②本名およびペンネーム
③年令・生年月日
④郵便番号・住所
⑤電話番号
⑥メールアドレス（可能な限り）
⑦職業・学校名
⑧応募用紙枚数
（4）未発表作であること
（5）応募は一人一点
（6）テーマは「薔薇」
（7）応募作品は返却しない。
（8）入賞作品の著作権は著作者に帰属。
ただし、主催者・作曲者は自由に詩を使用できる。

※編集担当より
本件は、会報発行日以前の締め切りですが、記録のため掲載させていただきました。

## 第29回 まほろばポエトリーステージ

### 野沢　啓　講演会
### 「いま、この時代に詩を書くということ」

**日時**　5月3日（土）14時より

**場所**　榛名まほろば

**会費**　1500円（1ドリンク付き）

**定員**　50名

**予約・申し込み**
電話・FAX　0279（55）0665

**野沢　啓（のざわ　けい）略歴**
詩人
1949年東京生まれ。
東京大学大学院
フランス語フランス文学科修士課程修了。
出版社経営のかたわら詩と評論の活動をつづけている。
H氏賞選考委員を2期つとめる。
本年度より丸山豊記念現代詩賞選考委員。
著書に詩集『大いなる帰還』『影の威嚇』『決意の人』、評論集『方法としての戦後詩』『詩の時間、詩という自由』『隠喩的思考』『移動論』がある。
本名の西谷能英の名で『出版文化再生―あらためて本の力を考える』、『出版 のためのテキスト実践技法／執筆篇』、『同／編集篇』、『同／総集篇』、編集者・執筆者のための秀丸エディタ超活用術』などがある。
現在、日本現代詩人会、日本文藝家協会所属。

## 第43回　朔太郎忌

### いまこそ、朔太郎

◇とき　2015年5月10日（日）
13時30分～17時（開場13時）

◇会場　前橋市民文化会館　大ホール

◇定員　1200人（入場無料）
◇内容
◆講演
「萩原朔太郎の詩と情熱」
蜂飼　耳（詩人）
◆対話
「いまこそ、朔太郎」
谷川俊太郎（詩人）
（聞き手）三浦雅士（文芸評論家）
◆演奏
群馬県立前橋高等学校
ギター・マンドリン部
◆合唱
前橋文学館友の会・楽しく歌う会
◆朔太郎詩朗読

※詳しくは、前橋文学館へお問い合わせください。
前橋市千代田町三丁目12-10
電話　027-235-8011

## 前橋ポエトリー・フェスティバル2015
## ～マエバシ猫町～

**日程**　2015年5月16日（土）～5月31日（日）
※プレスタート　2015年4月25日（土）
**会場**　前橋文学館・煥乎堂3階ふるほん書店・虫の音・馬場川通り紅茶スタンド・シネマまえばし・ギャラリー・アートスープ・前橋まちなか音楽館・アルキロコス・和心会
**連携会場**　萩原朔太郎記念館（敷島公園内）FRASCO・さくらカフェ
**主催**　芽部・前橋文学館
**後援**　思潮社・土曜美術社出版販売
**協力**　アトリエサード・NEKO EXPO・七月堂
**エクゼクティブパートナー**　広瀬大志・北爪満喜
詳細はHPをご確認ください
（「前橋ポエトリー・フェスティバル2015」で検索）

## 久保田穣さんを甦らせる会

**日時**　平成27年4月26日（日）
午後1時30分～4時30分
受付開始　午後1時
**場所**　群馬県青少年会館　1階プレイホール
前橋市荒牧町2番地12
（TEL 027-234-1131）
**第一部**　朗読　久保田穣さんの詩から
歌と話　久保田穣作詞・丸山亜季作曲
『スーホの白い馬』から
**第二部**　シンポジウム
「久保田穣さんが遺したものと
私たちが受け継ぐもの」
資料代二千円
申し込みは事務局まで
呼びかけ人　代表　群馬文学集団　大浦　暁生
群馬詩人会議　大塚　史朗
他
（事務局）松本美津枝方
〒374-0039　館林市美園町25-25
Tel&Fax 0276-74-1219

**【ご報告】年刊詩集における掲載内容について**

昨年11月23日の総会において、会員より「元会員が死去した場合、年間詩集等への記載が必要ではないか」とのご提案がありました。幹事会に持ち帰り検討した結果、「元会員が年度内に逝去の場合（分かる範囲で）訃報という形で、氏名　没年月日を掲載する」ことといたしました。年刊詩集で元会員の追悼文を掲載した経過がありますが、執筆者の自費扱い（原稿料を負担）で掲載しています。このような形での掲載は継続いたします。

## ◆◇◆ 編集後記 ◆◇◆

つい先日、「一年過ぎるのがどんどん速くなりますよね」と慌ただしい十二月を嘆いたと思ったのに、気がつけば年度がかわり四月も半ば・・・生活環境の変化や、異動等でお忙しい方も多いと思いますが、色々なイベントが予定されております。皆さんどうぞお出かけ下さい。現代詩作品展へのご参加も併せてよろしくお願い致します。また会員の方の受賞、詩集の発行などがありましたらお近くの幹事までぜひお知らせを。

今号では埼玉県在住の佐藤榮市様より詩集評を賜りました。お忙しい中、どうもありがとうございました。（泉）